

# 幻の古代道路を追って

池田 誠一

## ■【7】石仏の故事…御器所から石川の谷へ■

### 1 石仏の古代寺院

大正の初め、石仏(いしほとけ、昭和区)で天平時代の鬼瓦が掘り出されました(名古屋市文化財。図1)。その地は、昔は「古観音」という字になっており、周辺には「稚児宮」、「若宮前」などという字名や、幾つもの古墳と思える塚が点在していました。

子供の頃、鬼瓦の掘り出しを手伝ったという服部修政氏は、昭和53年、その「寺」と「塚」に「川」を加えた石仏の古代寺院にまつわる物語を、『知られざる石仏村』という本にまとめました(文献①)。そこには、名古屋考古学会会長だった吉田富夫氏の暗示もあったといいます。

図1  
石仏で掘り出された天平の鬼瓦



露橋から古渡を通して御器所台地上ったこれまでの古代道路の道影は、物語の地・石仏へと向かっているのです。今回は、その物語の跡を追いながら、古代道路の進んでいる道について考えてみたいと思います。

### 2 古代・石仏の物語

#### (1) 物語のあらまし

時代は天平。聖武天皇が仏教を国の基本とすべく、全国にどう広めていこうかと悩んでいた時代になります。

物語は、全国に国分寺・国文尼寺を設立するという詔の前年(740年)の秋、短期で神宮にも参らなかつた不可解な伊勢への行幸に始まります。著者服部氏はそれを、尾張国に観世音寺を建立するため派遣する皇子一行の旅立ちを見送るもの…と読みました。当時尾張国は東国の入口でした。寺の建設地は、熱田社の社家の支援で、神領だった御器所の地が選ばれました。御器所は「おんうつわところ」と書くように焼物の産地で、寺院の建設で問題となる瓦の製作に好都合でした。一行には、都の仏師、寺工、瓦師などの専門職が同行しており、工事が始まりました。併せて、寺の耕地を拡大するために石川(山崎川)の付け替えも行われました。

しかし、寺は完成できませんでした。竣工間近になって、賊徒の群れに襲われたのです。寺は焼失し、皇子(若宮)たちも逃げましたが悲惨な最期に終わりました。

その跡には、いくつもの塚が築かれ、焼けなかった石や瓦、刻み込まれた土地も残りました。そして八百年余の年を経て、名古屋城が築城される時、その石は城の石垣にするため持ち運ばれ、築城の記録に残ることになったのです。

## (2) 事実の存在

この話は、多くの仮定によって成り立っているため「物語」としましたが、単なる創作ではありません。いくつもの根拠がありました。大正まで残っていた史跡や古老の証言。そして江戸時代に記された文献です。

たとえば、

- ①若宮社、児宮社が塚の上に残っていた
- ②周辺にも多くの塚が点在した(図2)
- ③尾張国分寺等の瓦を焼いた窯があった
- ④戦国時代まで大量の巨石が存在した
- ⑤寺の堀と考えられる池跡が文献に見られる
- ⑥寺と考えられる地形改変の跡が存在した
- ⑦「古観音」等の字名が残っていた 等々。

そして、⑧天平時代の鬼瓦等が

図2

石仏の大正時代の古墳群。図の下に廃寺跡があり、それから北に古い塚が分布している(文献①)



出土したのです。とくに③の若宮窯と呼ばれる窯跡は、昭和初の耕地整理中に土地の削平で出現しました。そして尾張国分寺の出土瓦と同じ型(瓦当范)で焼かれたものであることが確認され、尾張国分寺も観世音寺の瓦もこの若宮窯で焼かれたことが分かったのです。(文献②)

これらから見れば、竣工前だったかもしれませんが、少なくとも古代に立派な寺院が石仏に存在したといえるでしょう。

## (3) 石仏から先の道

さて、本連載では、古代道路は古渡からほぼまっすぐに石仏まで伸びていたと想定しました。観世音寺の工事を740年代とみると、道路建設との前後関係は微妙ですが、その直線道路の目標物はここも寺の塔だったかもしれません。問題はその後です。

文献を調べてみると、足利健亮、金田章裕氏(共に京大)は、古代東海道は名古屋中心部

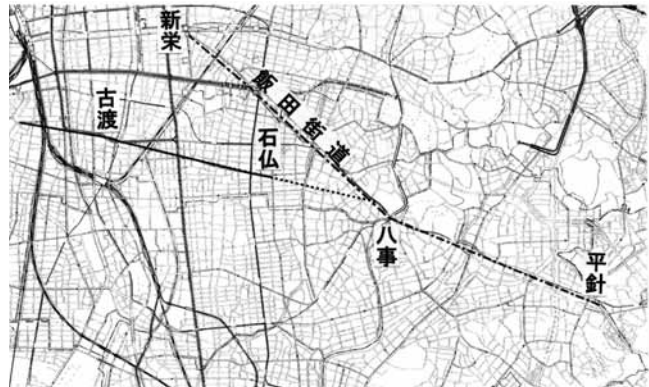


図3 古渡から石仏の線を延長すると八事付近で飯田街道に出るが…



図4 中央上部の石仏から右下に出ている道がある。また、右手には山崎川が見えるが、大正以前は大きく西に曲っていた。太い点線は古代以前の流れを想定したもの

から東南に飯田街道方向に平針(天白区)か、白土(日進市)に進んだのではないかとみています(文献④等)。ここでの推理でも、石仏をまっすぐに伸ばせば、今の八事付近に達し飯田街道の線に乗ることになります(図3)。しかしその通過ルートには丘陵が迫り出し、谷もあって直線性の確保は難しくなりそうです。

改めて石仏の付近の明治の地図を見ると、石仏から東南に延びている道が目に入ります(図4)。今は消えてしまった旧道ですが、両側に家が張り付き、藤成の神明社もこの道に面していたようです。八事の山稜を避けるとすると、この道の可能性はないでしょうか。とまれ、石仏からは直進したのか、右折するのか。ここは難しい選択になりました。

### 3 絶行 石仏をめぐる

#### … 古代寺院の遺跡を追って …

それでは古代寺院と古代道路の跡を追って石仏から東側の石川の谷へと歩いてみましょう。

#### (石仏へ)

地下鉄の荒畑駅の3番出口を出て、すぐ前の郡道と呼ばれる道を右に入ります。5分ほどで前回の到着地点だった出口交差点です。左に曲り、これまで追ってきた直線の延長上の道を進みます。次の信号の手前は大きな広見池の堤でしたが、今は面影はありません。道はこの信号でわずかですが右に振っています。この辺りが地籍図の直線の最後で、これから先の古い道筋ははっきりしません。

まっすぐ進み、幹線道路を越えると石仏地域になります。信号の手前で交差する細い道が旧道、塩付街道です。左に入るとすぐ、神社が目に入ります。角が白山神社で、その左に善昌寺があります。神社を奥に進むと、左

出口交差点から東を望む



白山神社。左に善昌寺が並んでいる



白山神社奥の摂社の中に「児宮社」(中央)がまつられている



塩付街道の曲り角

奥にいくつかの摂社がまつられています。その1つに児宮社があります。物語の中の稚児宮の古墳の上の社が移されたものとされます。この神社自体も古墳の上に造られているようです。神社の東口を出て塩付街道を北に進みます。街道を400mほど進み、大きなマンションを通り過ぎた所で道が右に別れる所があり、塩付街道はそこを曲ります。この付近が字「稚児宮」です。右の大きな敷地の中に稚児の宮の古墳群がありました。明治初めに近くの川原神社に移されたといわれます。幹線道路を右に曲り、次の信号を右折します。この交差点の東南側も工場の跡地ですが、ここには若宮の古墳と社がありました。この付近の



若宮前の交差点。正面が工場跡地

著者が若宮瓦窯と考えた小公園。古くは古墳だった？



字は「若宮前」です。ここで若宮瓦窯の跡が見つかりました。南に進むと、左側にもいくつかの古墳群があったといいますが、もちろんその痕跡も残りません。少し行った通りの右側に児童公園があります。ここは著者が若宮瓦窯跡と考えた所で、山の神があった古い因縁のある場所のようです。

#### 〈石川へ〉

すぐ南の塩付通5丁目の信号は、出口から東進して来た道の延長になります。左に曲ると、曲った左側付近が天平の鬼瓦が出土した所です。東西に溝があったとされ、この北一帯が観世音寺跡と考えられる所です。もちろん何の跡も残りません。そのまま東に進むと、道は緩やかに下ります。整形される前は段になっていたのでしょう。

下った先の幹線道路を左に曲ると山崎川(石川)です。川は緩やかに曲っていますが、



この付近で鬼瓦が出土した



江戸時代壇溪和尚の住んだという景勝地、壇溪

古代以前は北側の曲がり角の辺りからまっすぐ南に流れていたと著者はみています。それを、観世音寺の耕地を増やすために、堤を作って流れを現在のように曲げました。大正時代にはまだその跡が残っていたようです。その頃は、山崎川はその下流でもう1度不自然に流れを変えており、著者の想像はよく分かります(図4参照)。道路を渡って川を下流に進むと江戸時代に景勝とされた壇溪です。この渓谷も古代の物語が作り出したものだったのでしょか。近くにバス停もありますが、道を東にとって丘を上り道なりに下ると、1\*程で地下鉄のいりなか駅に着きます。

## 4 瓦の道

石仏で焼かれた瓦は、尾張国分寺の他、尾張元興寺でも使われていたとされます。とすると、一つのルートが浮かび上がります。

石仏→元興寺→〔萱津〕→国分寺(稲沢市) このルートは、逆に辿れば、これまで歩いてきた古代道路の想定ルートになるのです。

古代道路は基本的には律令制の事業として実施されました。しかしこの辺りの道がいつ造られたかということになるとまだ解明はされていません。瓦を運んだ道が幹線道路になったのか。幹線道路の脇に瓦を焼く場所ができたのか。あるいは同じ時期に構想され共用されたのか。あくまでも想像の域を出ませんが、瓦を運ぶ道の存在がまた一つ、この付近の古代道路の可能性を広げてくれたようです。

#### 〈主な参考文献〉

- ①服部修政『知られざる石仏村』(1978、自費)
- ②市史編集委員会『新修名古屋市史Ⅰ』(1993、名古屋市)
- ③水野時二監修『昭区和誌』(1987、昭区和役所他)
- ④藤岡健二郎編『古代日本の交通路Ⅰ』(1978、大明堂)